

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第509号 平成25年3月12日

三上の閃き

人というものは、一生懸命考えている時はなかなか良いアイデアが思い浮かばないものです。悩みに悩んだ挙句、「下手な考え、休むに似たり」という事が往々にしてあります。それでも、何気ない時に突然パッと素晴らしい(?)アイデアが閃いて、自分でも驚くような事があります。皆さんにも、そういう経験があるのではないのでしょうか。

どんな時に良いアイデアが閃くかは人によって様々だと思いますが、この事について、今から1000年以上も昔、中国の歐(おう)陽(よう)脩(しゅう)という人が面白い事をいっています。

歐陽脩(1007年6月から1072年7月)という人は政治家で詩人、歴史学者というマルチ人間ですが、この方が、良い考えの生まれ易いのは「馬上(ばじょう)」「枕上(ちんじょう)」「厠上(しじょう)」の三上であるといっています。即ち、「乗り物に乗っている時」、「頭を枕につけている時」、「トイレの中にいる時」に良いアイデアが浮かびやすいという訳ですが、いわれてみればなる程と思います。

乗り物に乗っている時は、体は乗り物に預けてしまい、リラックスしていると意外に良いアイデアが浮かぶ時が有ります。

トイレも、思考の場所としては良い条件が揃っています。まず静かです。それから適度の狭さが安心感を呼びます。昔の厠を想像すると、思索に耽るにはとても落ち着かない感じがしますが、我が家のトイレは様式ですから、周りに邪魔されず「考える人」になれます。トイレに新聞や雑誌を持ち込んで「読書」に耽る人もいるそうですが、その気持ちは分かります。

私は以前、「枕元にはメモ帳と筆記用具をいつも用意しておくように」といわれた事が有り、今もそれを実行しています。枕元のメモを活用した事は余りありませんが、閃きは一瞬であり、直ぐに泡沫(うたかた)のように消えてしまいますので、枕元とはいわず常にメモの用意を怠らぬようにしています。

「どうせ自分には良いアイデアなど浮かばない」と諦めている人もいるかも知れません。しかし、アイデアという花は、普段から思考の畑を耕している人の畑にしか咲きませんから、アイデアが浮かばないと嘆いている人は、自分は一体どこまで思考の畑を掘り返しているか振り返って見る必要があるでしょう。

東京工業大学教授の後藤尚久氏が、その著書「アイデアは如何に生まれるか」の中で、「天才といわれる人が創造するときの思考過程を詳しく分析した結果、凡人の私たちと変わらない」というロバート・ワイスバークの研究成果を紹介しています。

天才の思考過程はどういうものかという、

第1段階 資料集め

第2段階 集めた資料の加工

第3段階 孵化段階

第4段階 アイデアの誕生

第5段階 アイデアの具体化

というのですが、凡人は、第1段階、第2段階が不徹底で適当に妥協してしまい、結局、一番大事な孵化段階で孵化しきれず、湿った花火の様な状況に陥っているのではないかと、自分の反省を込めて感じています。

逆にいうと、徹底して必要な資料を探し、集めた資料をとことん分析して行く、その集中力とエネルギーを持ち合わせている人を天才というのかも知れません。

私は、天才には遠く及びませんが、それでも、出来るだけ資料を集め、自分なりにそれを料理し、納得できるまで考える事にしています。考えて、考えて、考えている内に、ある時思いもかけぬアイデアが浮かぶことは確かにあるものです。それは、天恵というべきものかも知れません。

最後に、歐陽脩の言葉として伝えられている「三多」をご紹介します。

これは、文章上達の極意を述べたもので、「看多」「做多」「商量多」を指しています。即ち、「沢山本を読む事」、「沢山文章を書く事」、「第三者の目で厳しく推敲する事」だそうですが、今も昔も原理は変わらないという事です。（塾頭：吉田 洋一）